



TITLE:

屬國と保護のあいだ--一八八〇年代
初頭、ヴェトナムをめぐる清佛交
渉

AUTHOR(S):

岡本, 隆司

CITATION:

岡本, 隆司. 屬國と保護のあいだ--一八八〇年代初頭、ヴェトナムをめぐる清佛交渉. 東洋史研究 2007, 66(1): 1-31

ISSUE DATE:

2007-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/138215>

RIGHT:

東洋史研究

第六十六卷 第一號 平成十九年六月發行

屬國と保護のあいだ

——一八八〇年代初頭、ヴェトナムをめぐる清佛交渉——

岡 本 隆 司

- はじめに
- 一 北京交渉
- 二 天津交渉
- 三 ブーレの解任
- 四 ブーレからトリクーへ
おわりに

はじめに

一八八五年六月、天津條約で終結した清佛戦争の結果、清朝は「屬國」のヴェトナムを「喪失」し、フランスはヴェトナムの植民地化達成に大きく歩をすすめた。このような結末を迎える、いわゆる「越南問題」の推移は、すでに多くの研究で精細に明らかになっている。⁽¹⁾ 大筋の事實關係はそれで、ほぼまちがいないし、もはやとりあげる問題はないようにも

思われる。

しかしながら、近年みなおされてきた清末中國の「屬國」關係という視點⁽²⁾から、この問題を跡づけてみると、清佛の具體的な外交交渉はいかなるものであつて、戦火を交えるにいたつた兩者は、何をめぐつて對立し、どのように折り合いえたのか、そもそも清朝はヴェトナムという「屬國」を「喪失」した、といえるのか、とりわけそうした問いが、あらためて浮かび上がってくる。まずこれまでの研究成果によつて、前後十數年間におよびる史實經過を、大づかみにたどつておこう。

一八六〇年代のコーチシナ併合で本格化したフランスのインドシナ侵略は、一八七四年のサイゴン條約の締結で、新たな段階をむかえる。その第二條に、ヴェトナム國王の「主權とあらゆる外國に對するその完全獨立 (la souveraineté du Roi de l'Annam et son entière indépendance vis-à-vis de toute puissance étrangère) を認める」第三條に、ヴェトナム國王は「フランスの保護に感謝して (En reconnaissance de cette protection)」、自國の對外政策をフランスのそれに從つて決定する⁽³⁾と規定し、阮朝ヴェトナムの本格的な保護領化に向かう契機となつたからである。

そして一八八〇年にはいると、北ヴェトナムのハノイ周邊、いわゆるトンキン地方でフランス軍の活動が活潑化しはじめ、清朝側においても、その動向を危惧する聲が高まつてくる。ヨーロッパで當時、駐佛公使を兼任していた曾紀澤は、ヴェトナムに對する清朝の宗主權をとなえて、フランス外交當局に抗議しはじめた。

曾紀澤がバリーで抗議活動を續ける一方で、一八八二年四月二五日には、リヴィエール (Henri Laurent Rivière) 海軍大佐ひきいる五百名のフランス軍が、ハノイを占領する。清朝側もこれに對抗して、廣西・雲南の軍隊がトンキンに進攻した。こうしてトンキン現地の軍事的な緊張が高まり、實際に衝突もおこつてくるなか、清佛の外交交渉は實質的に、ヨーロッパから中國に舞臺を移し、一〇月より北京駐在公使のブーレ (Frédéric-Albert Bouée) が清朝の政府當局と交渉をはじめ

た。そして、一月末には天津で北洋大臣李鴻章とのあいだに、トンキンに一種の勢力圏を劃定することで合意に達し、三カ條の覺書を取りかわす。

ここで收まるかにみえた兩國の紛争は、まもなく再燃する。一八八三年はじめに發足した新政權のフェリ(Jules Ferry)内閣が、李・ブーレ覺書を否認し、ブーレ公使を更迭、またトンキン現地では、ほぼ時を同じくしてリヴィエールが南定を占領するが、五月一九日に黑旗軍と交戦して戦死する。トンキンで清佛兩軍が撤退せずにならみあいがつづくうちに、サイゴン總督のアルマン(Jules Harmand)がヴェトナム政府と直接にフエ條約を結んだ。フランスは清朝の介入を拒否する姿勢を鮮明にうちだしたのである。清朝側もこうしたフランス側の舉動に對し、態度を極端に硬化させ、戦争をも辭さない構えをみせるようになった。かくて一八八三年末に山西の、翌年三月には北寧の會戦が起り、清朝軍は敗北した。この敗戦で北京に政變が起り、一八六〇年以來、外政で主導的立場にあつた恭親王奕訢が失脚したのは有名な事實である。

このように對立がきわめて嚴しいものとなつた局面を開闢するため、李鴻章は舊知のフランス海軍中佐フルニエ(François-Ernest Fournier)と交渉をもつて、一八八四年五月に協定をとりむすんだ。ところがこの協定を實行にうつす段階で、手違いが重なり、ついに清佛は全面的な戦争状態に入つてしまふ。陸上では清朝側の優勢、海戦ではフランス側の優勢のまま、一八八五年に入ると、洋關總稅務司ハート(Robert Hart)の工作が效を奏し、六月初めになつて、戦争を終結させる天津條約の締結にいたつた。

清佛間の「武力の對峙・衝突と外交交渉の過程は、現象的にきわめて複雑であ」つたものの、以上の概觀からわかるとおり、講和條約の成立までに、ただちにそのまま實現しなかつたとはいへ、雙方の對立を收拾に導く機會が、少なくとも二度あつた。一つは一八八二年末に合意した李・ブーレ覺書であり、いまひとつは一八八四年五月に調印をみた李・フルニエ協定である。

したがって従前の研究でも、両者は一八八五年の講和條約交渉とならんで、特筆されてきたところである。もっともその關心は、難澁な清佛交渉の過程で、挫折した和平の試みととらえるにすぎず、必ずしもその折衝、とりきめ、そして破綻が、雙方の立場、利害關心を具體的にあらわす、という觀點ではなかった。そのために史料の読み方、ひいては史實の解釋にも、まだ再考の餘地がある。本稿はそこで、すでに明らかなほかの事實経過はおおむね捨象し、まず李・ブーレ覺書を中心とした和平交渉をみなおそうと思う。それがひいては、當時の「越南問題」全體、かつ清朝の外交を再考するひとつの足がかりになるであろう。

一 北京 交渉

ヴェトナムをめぐる清佛の紛糾は、一八八〇年一月一日、曾紀澤がペテルブルグから、フランス外務省に送った抗議書翰にはじまる、というのが、當時のヨーロッパ人の理解である。⁽⁵⁾以來、八二年の半ばまで、フランスのトンキンにおける行動に抗議をくりかえしてきた曾紀澤に對し、新たに外相に就任したデュクレール (Charles Théodore Eugène Duclerc) は、かれとの交渉を事實上打ち切り、ヴェトナム問題の談判は北京駐在のブーレ公使が行うことを通告した。⁽⁷⁾これは曾紀澤との交渉が、ヴェトナムに對する清朝の宗主權とフランスのサイゴン條約との矛盾という「原則」の問題に陥って、打開の目途が立たなくなったからであり、また總理衙門は出先の曾紀澤に比べて協調的で、その態度にはかなりの溫度差がある、とみこしてのものだった。かくてそれまでバリーにあった雙方の「交渉の重心」は、北京に移ることになる。⁽⁸⁾

このように「ブーレの側からの接觸で始ま」った北京交渉は、しかしながら現實に總理衙門とのあいだでは、目に見える成果があがらなかった。ブーレがデュクレールの指示をうけ、一〇月一七日、清朝側のトンキン派兵に關して問い合わせた書翰⁽¹⁰⁾で幕を切つて落としたやりとりは、一〇月二四日、總理衙門が「いずれにしても、越南は中國の屬國 (un Etat dépendant de la Chine) である」と言及したところから、またもやいわゆる「原則」の問題に陥つてしまう。ブーレが一

月一日に北京を離れるまで、なおもしばしば應酬があったものの、けつきよく何も決まらなかったのである。

けれども、このブルーレと總理衙門との交渉を通じて、明らかになる點が二つある。ひとつはフランス側の姿勢である。

ブルーレは一〇月二四日の總理衙門からの書翰にこたえて、「そちらが越南を屬國だ (votre suzeraineté sur l'Annam) といいたせば、こちらも保護權をもっている、と反論せ (vous opposer notre protectorat) るをえず」、收拾がつかなくなるからそこには「手をふれないで (ne pas aborder ce côté de la question)」、「望ましい和解 (un accord infiniment désirable)」に達するほうがよい、と言明した。⁽¹²⁾ ブーレがこのように述べたのは、ともかくもトンキンの「現状維持 (le maintien du statu quo)」という志向と言葉を、清朝側から引き出していたからでもある。⁽¹³⁾ ここからフランス側の姿勢、少なくともこの交渉におけるブルーレの關心と方針は、ヴェトナムの「現状維持」をはかるにあり、むしろその内實をいかに定めるかにあったのがみてとれる。かれが清朝の「宗主權 (suzaineté)」もしくはフランスの「保護權 (protectorat)」という「原則」の問題を避けようとしたのは、両者が理論的に相容れないがために、雙方の行動を相互に規制できず、現實の情勢にまで影響をおよぼすおそれがあったためである。

そうだとすると、このとき清佛雙方が妥協に達しなかったのは、やはり清朝側が「原則」に執着し、「和解」の具體化がかなわなかったからだといえそうだが、必ずしもそうではない。そこでいまひとつ、この交渉経過でおさえておくべき點は、總理衙門がまったくブルーレのよびかけにとりあわなかったわけでもないことである。

一 一月四日發のブルーレの報告によれば、通譯官のフランダン (Joseph Hypolyte Frandin) は、總理衙門大臣の王文韶から「極祕裏に (très confidentiellement, mystérieusement même)」フランスと「容易に和解に達する」方策を示された。それは「トンキンの保護權 (le protectorat du Tonkin) を分割し」、「清朝は紅河以北を、フランスは以南をすべて占領する」というものである。⁽¹⁴⁾ ブーレは折しも、ハノイ駐在領事ケルガラデック (Alexandre Camille-Jules-Marie Le Jumeau, comte de Kergrader) から「私信」にて、中國國境地帯に「一種の緩衝地 (une espèce de matelas extérieur)」を設けて、清朝との衝

突を避けるべし、との進言を受けたこともあって、王文韶の提案にまったくの無關心ではありえなかった。⁽¹⁵⁾ ブーレと總理衙門との交渉のなかで、清佛「和解」の模索は、このように具體的な提案も出て、それなりに歩を進めていたわけである。けれどもこの「保護權」「分割」案は、北京ではそれ以上の進展をみないまま、交渉はひとまず終結してしまう。少なくとも以後の交渉経過を記すフランス側の史料には、觸れるところがない。

この問題に關して、興味ある記述を残すのは、清朝側の史料である。翌年はじめに總理衙門が上った奏摺のなかに、ブーレとの交渉経過を概述したくだりがある。

嗣いで該使臣、將に京を出で津に赴かんとするに因りて、臣等、之と來往會晤し、法越の一事に談及せり。該使臣先づ、其の西貢總督^{サイゴン}の辦理善からざるを咎め、兩國は員を派して法を設けて商辦せんと商及し、又た「越南の中國の各省に毗連したるは、中國の保護に歸さん」と言ふ。⁽¹⁶⁾

「本年九月初六日」つまり一〇月一七日の交渉開始から説き起こして、引用につづく文章なのだが、ここではブーレのほうが、清佛から代表を出して協議すること、ヴェトナムの中國に隣接する地域を清朝の「保護」下に置くことを提案した、という文脈になっている。ところが、ブーレがデュクレールにあてた報告には、代表による協議は、王文韶がもちかけたことになっているし、中國の隣接地域については、その「治安を守る (mettre hors d'atteinte la sécurité) ための方策を検討する」案を、同じく王文韶のほうから提起しており、⁽¹⁷⁾ 兩者の記録がくいちがっている。提案した主體も逆であり、その表現も「保護に歸さん」と「治安を守る」とで、かなり徑庭がある。このブーレの報告と同じ交渉内容を傳えたはずの曾紀澤あて電報には、

寶言^{ブーレ}へらく「法^{フランス}廷は西貢總督の辦理冒昧なるを咎めり、法の本意に非ずして、法は只だ約が如くせんことを要むるのみ。貢督、寶使^{われ}に託して調停せしめんとす。寶意^{われ}ふに中國先づ兵を撤し、再めて各の欽差を派し、此の事を商辦せんと欲す」と。答へて以く^{いは}「兵遽かに撤するに便ならず。若し各の欽差を派さば、自づから商辦すべし」と。寶^{ブーレ}、

應に商すべきの大畧を問ふ。答へて以く「約そ三端有り。邊界・商務・及び越須らく以て自立する有るべし」と。寶邊界の説を詢ぬ。告ぐるに以く「華、豈に越を削るの意有らんや。越北の各省、多く雲・粵と毗連せるに因りて、必ず保護するを要む」と。寶云へらく「若し以後、越北の各省は華の護に歸し、南は法の護に歸さば、何如」と。答へて以く「亦た應に商すべきの列に在り」と。寶云く「派員の一説、當ちに即ちに外部に達知せん」と。

という。これは八二年十一月一二日に發送したものであつて、もつとはつきり、いわゆる「保護權」の「分割」をブーレの發案だといきつてゐるのである。

こうした齟齬が生じた原因、眞相はわからない。いずれにしても明白なのは、北京ではこのような具體案が出て、歩み寄りの契機はありながらも、何も決定をみなかったこと、交渉は一月の後半から、天津に舞臺をうつしたことである。

二 天津 交渉

したがつて天津における、ブーレと北洋大臣李鴻章との交渉は、ほぼ北京交渉の繼續であつたといつてよい。フランス側は交渉当事者がかわつていないし、總理衙門は前註(16)の引用文につづいて、「そこで以上の事情を函で署北洋大臣李鴻章につたえ、フランス公使ブーレが天津に來たら、臨機應變に對處させるようにした」と述べ、また李鴻章のほうも、

先だつて十一月九日・十一月一二日の公函を拜受、お示しのフランス公使ブーレとヴェトナム問題を協議なされた問

答節略は、いっさい謹んで承りました。

と應じている。⁽¹⁹⁾とくに「問答節略」というのは、日附からみても、前註(18)に引用した曾紀澤あて電報と内容を同じくするものである。ここから、李鴻章の交渉に臨む姿勢も、上でみてきた北京交渉での論點を前提としていたことがわかる。⁽²⁰⁾天津の李・ブーレ交渉をそう位置づけることで、清佛雙方の利害關心もいっそう明らかになろう。

この交渉は實質的に、わずか二日間であつた。十一月二七日に天津のフランス領事館で李鴻章とブーレが會談し、

北 圻 要 圖



おおよその合意がなり、翌日それにもとづき、ブーレが用意した草稿を馬建忠との協議を通じて成文化したものが、三カ條のいわゆる李・ブーレ覺書である。

その内容は、「(一)雙方が若干里撤退する、(二)國境とソンコイ河のあいだの中間地帯を二分し、その北側を中國が、南側をフランスが「巡查保護」する、(三)トンキンの現狀を維持する、」つまり一種の緩衝地帯を設置しよう⁽²¹⁾というものであった。このように、北京交渉以來の模索が實を結んだかのような内容なのだが、これで果たして、雙方の争點はまったく解消したのであろうか。

そのもつとも重要な第三條をみてみよう。まず漢文テキストである。

今治境に事を滋くする匪徒を驅逐し、地面をして以て治理平靜するを得せしめんが爲め、中・法兩國國家は、雲南・廣西の界外と紅江との中間の地に在りて、應

に界限を劃定し、界北は中國の巡查保護に歸し、界南は法國の巡查保護に歸すべし。中・法は互ひに約して永く此の局を保つを申明し、並びに互ひに相ひ約を立て、越南北圻の現有の全境を將て、永遠に保全し、以て日後の外來侵犯の事を拒まん。⁽²²⁾

これに相當する佛文テキストは、以下のようになっている。

トンキンを荒らし擄取している匪賊を一掃し、そこに治政をもたらし治安を守るために、兩政府は紅河と清朝國境との間の地域に共通の境界線を引くことで合意する。その境界線以北の地域は、清朝の監視のもとに置き (places sous la surveillance de la Chine)、以南の地域はフランス當局の監視のもとに (sous celle des autorités françaises) あるものとする。清朝とフランスはこのようにとりきめた現狀を維持し (maintenir le statu quo)、その範圍内において、外から攻撃を加えんとするあらゆる企てから、永久にトンキンを保全することを互いに約するものとする。⁽²³⁾

大づかみな意味内容は、兩者ちがいがないようにみえる。しかし注意すべきは、前者の「巡查保護」という文言である。佛文テキストでこれにあたるのは「監視」であつて、漢文テキストで嚴密にいえば、「巡查」のみに相當する表現であるう。

これは決して偶然の齟齬ではない。いずれも「匪賊を一掃し」「治安を守る」という同じ行動内容、「現狀を維持し」「トンキンを保全する」という同じ行動目的を指しながら、ブーレが佛文テキストで、「保護」にあたる術語をことさらに避けたものとみなすべきである。何となれば、一月二七日の李・ブーレ會談を記した記録では、この「保護」という表現がしきりにやりとりされたことをつたえ、しかもフランス語では、別の譯語をあてているからである。たとえば、その漢文テキストは、

答へて云へらくは「……今法國、越南の事宜を議辦するは、當に上に中國の藩服を綏撫するの心を安んじ、外に羣喙鼓簧の論を息むるを以て、第一の要義と爲すべし。兩國若し大臣を派し會議せば、宜しく條約の上に於て載明すらく

「法國は越南を認めて中國の藩屬と爲す、中・法兩國は公同に保護し、以て睦誼を敦うす」等の語あるべきに似たり。則ち謠言を造作する者、既に藉口する所無くして、中國の藩服を綏撫するの心も、亦た稍や安んずべし。……」

寶云へらく「……但し〈公同に保護〉の四字は、恐らくは分別甚だしくは清楚ならざらん。越南、中國の屬邦爲らば、則ち中國固より越南を保護するの權有り、如し預め界限を分たずんば、日後必ず相ひ責成を諉し、相ひ權利を爭ふの處有らん。且つ法國の越南を保護するの權は、之を中國に得たるか、抑も自ら之を有するか。中華は越南の上國爲らば、今法國をして越南を保護せしめんか、是れ保護の權を以て法國に授くるなり。如し法國自ら其の權を有せんか、是れ中國既に已に越南を保護せり矣、而も法國復た之を保護す、其の事甚だしくは便ならざるなり。」⁽²⁴⁾

とあり、これに相當する佛文テキストは、

「以下のように宣言してはどうだろうか。一方で清朝は、フランスの、すでにサイゴン六州で行使しているヴェトナムにおける宗主權 (votre suzeraineté dans l'Annam) を承認する。他方でフランスは、ヴェトナムの残りの地方に對する清朝の宗主權 (la suzeraineté de la Chine dans le reste de l'Annam) を承認する。そこでは兩國が共同で保護權を行使する (y exercer le Protectorat conjointement avec nous) 」。このように宣言するのが、もつとも多くの納得をえるやり方だし、これならフランスの利害を損なうことなく、清朝の自尊心 (notre amour-propre) も守られる。」

「ここで問題にしているのは、ヴェトナム全體ではなく、トンキンのことだけです。宗主權と保護權という言葉 (ces mots de suzeraineté et de protectorat) は、それを定義づける作業をしてからでなくては、むすびつけることはできません。保護權に共同することを含ませる (La communauté dans le protectorat) なら、そこには分割 (un partage)⁽²⁵⁾ が必要でしょう。清朝が何をお望みなのか、まだはつきりとわかりません。」

という。雙方の文章は繁簡のみならず構成にも、かなりのくいちがひがある。けれども漢語で「保護」といった場合には、必ず protectorat という術語があてられており、「宗主權 (suzeraineté)」と對置する概念になっている。

これは認識・用法としては正しい。そもそも李鴻章の交渉は、總理衙門むけの説明によれば、「（ヴェトナムが）中國の藩封だ」というところから問題に入らなくてはならぬ⁽²⁶⁾と考えたものだった。それはブーレが「明らかに我が屬國であるのを知りながら」、そこに立ち入らないようにしたからである。李鴻章としては、まずこのことで「開宗明義」して置き、しかるのちにブーレが「ただ、清朝・フランスがたがいに保護しあい、境界を劃定することをみとめさえすれば、ヴェトナムが清朝の屬邦だということは、いわずともわかるようになる⁽²⁷⁾」という方針だった。清朝側が北京交渉以來、トンキン南北勢力劃定案を支持したねらいは、ここによりやく明らかになる。清朝に歸すべき勢力圏に「保護」を留保せねばならなかったのは、その「保護」がとりもなおさず、ヴェトナムが「屬邦」たることの證明であつたからである。

いっぽうブーレが、「なによりもまず、保護權もしくは宗主權という理論的な問題（Les questions théoriques de protectorat ou de suzeraineté）を、棚上げに」しようとしたのは、それまでの交渉方針からして當然だった。かつまたかれは、現實の「治安」確保と「和解」成立のため、トンキンの南北勢力劃定案に必ずしも反對ではなかつた⁽²⁹⁾。しかし李鴻章から、勢力劃定と關わつて、このように「宗主權」と不可分な「保護」という概念を出されては、安易にそれを受け容れることはできない。

雙方の利害はしたがつて、ともにトンキンの「現状」を動かさないことを望みつつ、同時に清朝側は、「保護」という漢語概念で、ヴェトナムに對する「宗主權」を主張しようとするにあり、フランス側はサイゴン條約の存在を暗黙の前提にしなが、⁽²⁸⁾「理論的な問題」、「保護權」「宗主權」という術語を避けるにあつたわけである。兩者は衝突を回避する行動としては同じ方針ながら、概念規定はまったく逆の方向を向いていた。

そこで兩者が妥協するには、合意できる行動を明確に規定すると同時に、矛盾する概念は雙方ともに納得できる表現にしておくはならない。李・ブーレ覺書の佛文テキストが、「保護權（protectorat）」といわずに「監視（surveillance）」とし、「馬建忠が譯出」した漢文テキストで、それを「巡查保護」というのは、けだしそうした苦心の産物であろう。「保護」

は、漢文では言わなくてはならず、佛文では言つてはならなかった。馬建忠が條文確定にあたつて、「ブーレ公使が起稿し、三時間の長きにわたつて討論し、草稿は七たび八たび改めて、ようやく完成した」と報告したのも、あながち誇張ではなかったのかもしれない。

三 ブーレの解任

ブーレは天津で覺書を合意したのち、その趣旨をあらためて北京の總理衙門に知らせ、その承認をもとりつけたうえで、本國に報告・打電した。⁽³²⁾ さきにパリにとどいた、その電報の文面という。

直隸總督とむすび、總理衙門も同意した協定案が、次の便にてとどきます。その内容は、雲南の開放、フランスのトンキン保護の承認 (reconnaissance de la protection française au Tonkin) —— ただし中國國境ぞいの地域は除く——、外

からのあらゆる「攻撃の」企てに對するこの情況の相互保證、⁽³³⁾ 虚偽・錯誤はないといつてよい。けれども前節の考察に鑑みれば、あらゆる點において精確な措辭だとはいえないであらう。

この場合の「保護 (protection)」は、サイゴン條約にも明記する術語だが、嚴密に言えば、行動をあらわす抽象名詞であつて、「保護權」という語とはニュアンスを異とする。覺書佛文テキストの「監視 (surveillance)」⁽³⁴⁾、あるいは北京交渉時に使つた「治安を守る」という文言と同じ内容を指し、しかもなおかつその行動を、フランスがサイゴン條約で明記しないながらも事實上、獲得していた「保護權」にむすびつける語彙として用いたものであらう。じじつ同時代の記録は、これを「トンキンに對するフランスの保護權の承認 (reconnaissance du protectorat français sur Tonkin)」⁽³⁵⁾ と言ひ換えているし、ブーレ自身ものちには、意識的か無意識的か、同様の言い換えをしている。⁽³⁶⁾ 當時のフランス側がめざしたところの心づもりでは、當然そう理解すべきものだった。しかし果たして、覺書をもつて清朝が「トンキンに對するフランスの保護

權」を承認した、といえるだろうか。この文面と経緯から、そもそも覺書のはらんでいた問題がうかがあがつてくる。

デュクレール外相はこの知らせをうけて、一八八三年一月九日、李・ブーレ覺書を承認することにした。けれどもまもなく、ブーレの正式かつ具體的な報告書がとどく前に、デュクレール外相は任を去り、二月二二日に第二次フェリ内閣が成立する。この新政権はまもなく李・ブーレ覺書を否認し、ブーレは召還を命ぜられる。そこで「ブーレ召還は法律問題のようだが、實際は全くの政治的問題である」といわれてきた。⁽³⁶⁾これはフランスが政權交代によって、外交方針をあらためた、というにあり、當時の李鴻章が「折しもフランス本國で内紛があり、政權がかわって翻然と政策を變更し、またブーレ公使を解任召還した」と論じたように、むしろ清朝側のみかたに即したものであろう。それがまったく誤っているというわけではない。けれどもいわゆる「法律問題」、換言すれば、李・ブーレ覺書に内在した問題が、まったく作用しなかったわけではない。

三月五日、ブーレ解任を命じた電報に、「この覺書にはわれわれの同意できない譲歩がしてある」という。⁽³⁸⁾フランス側としてはそもそも、サイゴン條約でとりきめた、ヴェトナムに對する「保護」を清朝にみとめさせなくてはならない。ブーレの交渉ももちろん、それが前提である。ところが李・ブーレ覺書で、清朝が「宗主權」を完全に放棄したことはなかったのであって、それでも清朝側が「フランスの保護權」を「承認」した、とみなすかどうかで評價が分かれた。デュクレール外相がそれを肯定的にみたのに對し、フェリ政權はそこに「同意できな」かった。⁽³⁹⁾「ブーレが清朝との交渉にひきこまれて道を誤った、という意見に達した」のである。

海軍大臣兼植民地大臣代理のマイ (François Césaire de Maly) はこれに先だって、李・ブーレ覺書が「清朝の宗主權を承認する (reconait le droit de suzeraineté de la Chine) もののようにみえる」といい、『ノースチャイナ・ヘラルド』紙をはじめとする新聞報道を例にあげ、「ブーレ氏はトンキンにおけるフランスの利害を、完全には擁護しなかった」と、外務省に批判を浴びせている。李・ブーレ覺書はこのように第三者には、フランスの「保護權」と「兩立しない」清朝の

「宗主權」をも「承認」した文書に映るものだった。⁽⁴⁰⁾ ほどなく外相に就任したシャルメル・ラクル (Paul Armand Challemeil-Lacour) は、七月に議會下院の答辯で、覺書を読み上げたうえで、それは「保護權分割のとりきめにすぎない (tout simplement le partage du protectorat)」⁽⁴¹⁾ といきついている。ブーレが條文作成にあたつて回避しようとしたはずの解釋をとつたのであつて、けだし清朝側のねらいも、そこにあつた。前註(27)に引いた李鴻章の言は、清朝内部だけで通用する獨善的な言辭では決してなかつたわけである。

自國側から出てきた、このような「非難」はブーレにとって、「正反對」で心外きわまりないものだった。⁽⁴²⁾ が、しかし覺書に込めた清朝側のねらいは、やがてかれ自身も思い知らされることになる。

ブーレは上海で解任の電報をうけとると、それに辯明して本國に自分の交渉經過を説明しつつ、あらためて天津に赴き、李鴻章とも會談をもつた。そのとき交わしたやりとりを報告して言う。

……

總督は言葉をついで、「それでは、フランスはヴェトナムに對する清朝の宗主權承認 (reconnaissance notre droit de suzeraineté sur l'Annam) を、はつきり拒むわけなのか。しかしこの權利は、明々白々、動かし難い。絶えたことのない傳統で支えられているからだ。……」

「……しかもサイゴン條約は、清朝を介さずに結ばれたものだから、われわれがそれを尊重するいわれはない。またそれが北京に通知されたとき、ご存知のとおり、この國に關しては、屬邦⁽⁴³⁾ (vassalité) だとはつきり表明しておいたはずだ。そちらが今日となつては、そう思いたくないのであらうが。」……

總督はつづけて「……ちよいどいま、ここに嗣德王の戶部尙書 (le Ministre des Finances du roi Tu-Duc) がいる。わざわざかれがやってきたのは、これまでと變わらぬ言葉を述べるため、屬邦として當然受くべき援助 (l'appui inhérent à la vassalité) を清朝にもとめて、フランスに對抗するためだった。かれはヴェトナムの屬邦たる義務を放棄せずに、

その恩典を求めたのである。」

ややあって、またいった。「フランスは清朝の宗主権を、そしてそれにもなうトンキン問題に對する清朝の介入権を承認したくないのか。」……

……わたしが反論した。

「しかし、清佛が合意した協定のなかで、清朝の宗主権（votre droit de suzeraineté）は言及なさいませんでした。それでフランスも、清朝が納得できる表現のはずだったと理解したのです……」

「なるほど、そこにはわれわれの宗主権を記載してはいない。けれどもそちらとしても、それを公式に否認する意味の（*en impliquant la méconnaissance formelle*）ことは、何もいわなかったはずだ。……」

これに「驚愕をあらわした」と述べるブルーレは、⁽⁴⁴⁾ ついで北京にのぼると、またもや總理衙門から、ほぼ同じ言葉を聞かされることになる。

「ヴェトナムは清朝の朝貢國（un pays tributaire de la Chine）で、その屬國としての義務（[les] devoirs de sa vassalité）を忌避しようとしたことはないし、清朝政府のほうは、その國事に干渉する義務と權利がある」……

わたしはつとめて、清朝の宗主権（[les] droits de suzeraineté de la Chine）に反対し、それは現實というよりむしろ觀念的、實用というよりむしろ感情的なもの（plus platoniques que réels, plus sentimentaux qu'utilés）だといひ、……あらためて、一八七四年のわが「サイゴン」條約が締結されたとき、清朝はその反対をしめすために何もしなかったし、それ以來、抗議はあつても、もっぱら空論（un caractère purement théorique）でしかなかった、といつた。

「衙門は……その過去の論法へたちもどつ（revenant à son argumentation passée）」た、⁽⁴⁵⁾ といつた、まさしく「原則」問題への回歸である。けっきょくブルーレは、自らの失敗を事實上とめざるをえなかった。かれが交渉をすすめるにあたって、回避して成果を上げた、と信じていたその係争點に、いつしかひきもどされていたわけである。

四 ブーレからトリクーへ

ブーレの後任が到着するまで、駐日公使のトリクー (Arthur Tricou) がヴェトナム問題を協議する全權特使として、六月のはじめ中國に赴任、上海でまちうけていた李鴻章と、さっそく交渉をはじめた。⁽⁴⁶⁾しかしその交渉は、上のような経緯をうけたものだったから、そのやりとりはたちまち、清越宗屬關係の是非を問う「原則」の問題に陥って停頓する。トリクーは解任後のブーレと同じ應酬をくりかえさなくてはならなかったばかりか、一八七五年當時のサイゴン條約承認問題にまで、さかのぼって議論せざるをえなかった。

そのやりとりの一端を清朝側の史料でみておこう。まず六月八日の會談。

答へて以く「……但だ越は久しく中國の屬邦爲り、貴國は斷じて中國に勉強して認めざらしめ難し」と。

トリクー

脱云へらく「越の中國の屬邦爲るは、法國、甲戌に約を立てし自り以後、已に明文有りて、斷じて肯認せず。中國必ず自ら越南の上國と認めんと欲するに至りては、本國も亦た相ひ強ひ難し。之を總ずるに、今日務めて須らく詢明すべき貴國の意は、他日、越南を或いは明助し或いは暗助し以て我を攻めんとするや否やにあり。本國切に明らかに此の意を知り、以て調兵の數目を定めんと願ふ。……」と。⁽⁴⁷⁾

つぎに六月一七日。

脱使來見したるに、攜へて彼國の外部の電報を有す。其れをして繙譯に朗誦せしめて、曰く「汝問へ、中國如し法と和を失はんと欲さば、我已に豫備したること整齊たれば、斷じて因循退讓せず。如し中國兵を派し、越南を明らかに助くれば、或いは暗かに助くれば、先づ説明すべし、と。如し越を助けずんば、一の確實なる憑據を取るを要す、電覆せよ」等語あり。

答へて以く「中國は並びに法國と和を失ふを願ふの意無し。但だ越は中華の屬國爲ること、已に數千百年、法は我に

強ひて認めざらしむる能はず。此の時、法越既に經に兵を交ふ、想ふに中國は未だ必ずしも越を助けざらん。然れども法、華と辦法を妥商せずんば、辦ずる所如何なるを論する無く、華は終に認むる能はず」と。

脱云へらく「法は越南と甲戌の約ありたるに、當ちに即ちに中國に照會せり、現在必ず須らく約に照らして辦理すべし」と。

答へて云く「甲戌の約、當日總署照覆して、駁して以く〈越南は是れ中國の屬國たり〉と。明らかに是れ此の約を認めざるなり」と。

……

脱云へらくは「請ふらくは、速やかに國家に電告して日後の越事を管せざるを明示し、我に一の文書の憑據を給されんことを」と。

答へて云く「此れ斷じて行ふ能はざるの事なり」と。……

脱遂に忿然として色を作し衣を拂ひて出づ。⁽⁴⁸⁾

ブルーの交渉を經、それが挫折した以上は、當時のように「原則」を「棚上げにする」のは、たがいにもはやできないことであつた。トリクーは上にも見えるとおり、早くも、清朝側のこうした遅延「戦術」、そして不毛な議論に業を煮やし、「中途半端なやり方」の危険性をうったえて、斷乎たる措置を建言する。⁽⁴⁹⁾

……フランスが清朝に、協定できまつたものと保護權の承認 (reconnaissance notre Protectorat) を迫つて、拒まれている間に、清朝は嗣德帝 (Empereur Tu Duc) と内密に氣脈を通じ、共和國政府との條約には調印しないよう命ずるでありましょう。かくてヴェトナムでも清朝でも損害をうけ、日々わが地位の惡化をみることになるでしょう。だからしめくくり、さきに申しあげた提案にたちもどらせていただきたい。わたしの考えでは、フエ宮廷に大きな一撃をあたえ、中華帝國の沿岸に海軍で強力な牽制をすれば、いままでわれわれがぐずぐずして、どうせ實行しないのだ、

とうけとりがちだった相手の侮りを挫くに足りません。どうせ武力を行使せねばならぬのなら、せめて機をのがさぬこととです。⁽⁵⁰⁾

こうした不信と猜疑がまもなく、ヴェトナム政府とのフエ條約締結につながってゆくのはいうまでもない。フランス側の外交はここに、大きく轉換をはじめたのである。

トリクーがこののち二カ月にわたって、李鴻章と行った交渉は、いわばフランス側の時間稼ぎと牽制にすぎない、との批評もある。⁽⁵¹⁾ それでも當時、フランス當局が、外交交渉の決裂を望まなかったのは事實だし、その交渉が進捗するには、何が必要だったかをみておくことも、當時の情勢を考える上で、あながち無駄ではあるまい。六月末日の會談は、そうした意味で注目値する。李鴻章の報告によれば、トリクーのほうから、

……商する所の辦法は、總じて兩國の體面を保全するを以て主と爲す。中國は必ずしも明らかに越南を認めて屬國と爲さず、法國も亦た必ずしも明らかに保護の權を認めず。若し明らかに認めんと欲さば、必ず互ひに己れが見を執り、總じて説き得て合攏し難からん。提明する勿きの妙と爲すに如かず。惟だ兩國自ら已に有するの權利を保つのみ。本大臣當ちに即ちに一の節略を擬し、明日持呈せん。……⁽⁵²⁾

とよびかけて、合意づくりをすすめようとした、という。現實にどちらが上の趣旨を言い出したのかは確言できない。いずれにせよ、この経緯から明らかになるのは、ブルー流にいえば「棚上げ」の、「原則」を明示しない方式しか、雙方にとって交渉をすすめる手だてがなかった、ということである。⁽⁵⁴⁾ 翌七月一日トリクーが、「宗主權および保護權という文言を使わずに (laissant de côté les mots de suzeraineté et de Protectorat)」提案した「節略 (propositions)」に對し、⁽⁵⁵⁾

節略の稱する所の各節は、中國の意見と未だ合はず。越南の素より中國の屬邦爲るは、天下共に知れり。今吾が兩國、一の兩に相ひ礙げざるの法を商さんと欲す、故に「必ずしも顯然に屬邦・保護の字様を提及せず」の説有り。然れども究むるに、顯然と屬國の名分を棄却すべからず。節略の内に稱する「中國は顯然と或いは暗中に越事に干預せざる

を約明す」の一語が如きは、豈に顯然と屬邦の名分を棄却するに非ざらんや。……⁽⁵⁶⁾

と答えた、と記しているのは、如實に李鴻章の關心のありようを示す。ここでは「屬國の名分」の存立が、ヴェトナム干渉否認を明記するかどうかにかかわっており、「屬國」という「原則」を明示せずに、行動上の規定で自らの「屬國」關係を表現しようとするのは、やはりブーレとの交渉と同じ論理であった。

このようにみてくると、清朝の側では、あくまで自らの解釋にしたがいさえすれば、李・ブーレ覺書の内容が許容、妥協できる条件だったということになる。少なくとも總理衙門と李鴻章は、そうであった。⁽⁵⁷⁾したがって當時、フランス下院が公式に否認した李・ブーレ覺書、トンキンの「保護權分割 (Le partage du Protectorat)」案も、⁽⁵⁸⁾清朝の側では依然、存続していた選擇肢である。時を同じくして、曾紀澤はバリでその交渉を試み續けていたし、⁽⁵⁹⁾李鴻章はフエ條約の締結を知った後でさえ、トリクーとの交渉でその案を提示している⁽⁶⁰⁾のである。

これでは、妥結への見通しがたつはずはなかった。「原則」を「棚上げにして」ようやく覺書にこぎつけたブーレが、「同意できない讓歩」をしたと自國から非難をうけたのは、清朝の側が覺書の規定を、「棚上げ」したはずの自らの「原則」に結びつけていたからである。フランス側からすれば、自身の「保護權」が清朝の「屬國」「宗主權」の概念と矛盾する、「兩立しない」とみなす以上、清朝の姿勢を變えないかぎり、自らの「原則」を「棚上げにして」は、「棚上げ」のまま喪失しかねない。清朝の提案どおりに李・ブーレ覺書の内容を許容しては、トンキンの「保護權」をひきわたすことにつながり、フランスの「原則」をみずから否定してしまうおそれがある。曾紀澤との會談でフエリが漏らした、

清朝は實際には、……北京朝廷が全ヴェトナムにおよぶと主張する、ほとんど效力のない宗主權を、ヴェトナムの領土の半ばに對する眞の領有に變えようと求めている。⁽⁶¹⁾

という言葉が、フランス側の清朝に對する不信感をいつくしている。李・ブーレ覺書のような「現状維持」の方法は、その點において、もはや論外であった。トリクーがいっそう強硬な立場で交渉に臨み、自らの「原則」を決して譲ろうと

しなかったのは、ブーレ交渉とその挫折の必然的な歸結であった。

おわりに

フランスにとってトンキンへの軍事介入は、サイゴン條約に規定する「保護」であつて、むしろ當然の行動だつた。それは事實上、既得の「保護權」にもとづく行動と認識されており、いまだ公式な明文はなくとも、フランス側の「原則」とは、トンキンの「保護權」であつた。⁽⁶²⁾ところが清朝の側が「宗主權」をとなえて、これに抗議するばかりか、現地の行動を阻害する姿勢をも打ち出すにおよんで、清佛の對立・交渉が不可避となる。局面打開を託されたブーレの交渉方針は、「原則」に立ち入らないことで、行動上の清佛「和解」をはかるにあつた。そこにかれが雙方の「原則」を、總理衙門に「あいられない」とうったえ、李鴻章に「棚上げにする」ととなえたゆえんがある。

そのなかで、トンキンの「治安」を守り「現状を維持する」ため、具體的に出てきた「和解」案が、南北の勢力圏劃定であつた。ブーレは「棚上げ」の方針とこの具體案とをむすびつけて妥協をはかろうとした。もちろんそのさいに、フランスの「利害」と「原則」にかかわる「讓歩」をしたつもりはなかつたであらう。トンキンの勢力圏分割案を軸に、苦心のすえできあがつた李・ブーレ覺書は、佛文テキストではその主張にそつて、劃定した勢力圏に對し、「保護」という術語を避けた文面になつていた。それはフランス側にとっては、ブーレも含めて、清朝がフランスの「保護權」を「承認」した、と讀まれるべきものであつた。

しかし清朝側のみかたは異なる。清朝も自らの「利害」と「原則」にかかわる「讓歩」をしたつもりはなかつた。このとき總理衙門も李鴻章も、そろつて「保護」という文言に執着し、覺書の漢文テキストにそう書き込んだのは、ヴェトナムは依然として、清朝の「屬邦」だというにあつたからである。「屬邦」たることを西洋に主張しようとすれば、「保護」の裏づけが必要だつた。そのあたりの論理は、交渉當事者ならざる人物がブーレの交渉後に上奏した、以下のような一文

が明示してくれる。

中國の謂ふ所の屬國は、即ち外國の謂ふ所の保護なり。……査するに、法越和約に云へらく「法國は、越國が自主の權を操つに係り、何れの國にも遵服する有るに非ざるを明知す。儼し匪の梗する、並びに外國の侵擾する有らば、法國は即ちに當に幫助すべし」と。是れ越南は中國の屬國に非ざるを明らかに謂ひて、而して以て自ら幫助するを許さんと欲するなり。保護に假託して、以て自ら其の蠶食の謀を便ならしめんとす。日本の琉球を滅ぼすの故智が如し。

然らば則ち中國、越南を爭はんと欲さば、先づ屬國の名を爭ふを必ず、屬國を存さんと欲さば、先づ保護の實を存すを必ず。⁽⁶³⁾

ここに清朝の側でも、「屬國の名」はとりもなおさず「保護の實」と不可分だとする論理、フランスとの争點は後者ののだとする認識が、ほぼ固まってくる。李・ブーレ覺書の文面は「原則」にふれないにもかかわらず、いなふれないからこそ、たがいに同じく暗黙のうちに、それを「原則」にむすびつけようとした。そのためブーレが、フランス側が期待したような、清朝側の認識と行動は、けっきょく引き出すことができなかった。

「一種の緩衝地帯を設置し」「現状を維持する」⁽⁶⁴⁾という當面の行動上で、それなりの「和解」合意に達した李・ブーレ覺書は、その行動がもとづき、また表現するところの永續的な「原則」に立ち入らなかつたことで、逆に「矛盾のくみあわせ (une combinaison contradictoire)」と化し、「原則」と「利害」の對立をきわだたせ、深めてゆく「禍根 (une source d'embarras et de conflits inévitables)」になりかねない。⁽⁶⁵⁾覺書の否認とブーレの召還は、そのことをフランス側が明確に認識し、對處を決斷したことを象徴するものだった。フランス側はやがて、トリクールの言にみられるとおり、李・ブーレ覺書のような玉虫色の糊塗ではなく、明確な「原則」問題の決着をはかる意思をかためる。

いっぽう清朝側としては、李・ブーレ覺書合意の前後を通じ、姿勢と解釋は一貫していた。ブーレが「棚上げにし」たはずの「原則」は、はじめから規定すべき行動と結びついていた。フランス側がそこに氣づいて、「原則」問題にたちか

えると、清朝側もあらためて明示的に自らの「原則」を主張しはじめる。それと同時に、プーレとの交渉を経て、「原則」的な概念明記の「棚上げ」とトンキンの「保護権分割」とを、フランスと妥協できる条件だと見だめたうえで、新たな交渉に臨むようになった。

それがフランス側と解釋を異としていたのはもとより、清朝内部でさえ現実の行動として實現できるかどうか、じつはおぼつかなかった。⁽⁶⁶⁾兩國關係が一八八三年後半に入って、急速に險惡化するの、そうした要因が重なったものであって、やがて衝突とあらたな妥協の模索を餘儀なくされてゆくのである。

註

Abréviation :

AE : France, Ministère des affaires étrangères, Archives diplomatiques, Correspondance politique, Chine

DDF : Documents diplomatiques français (1871-1914), 1re Série(1871-1900), Tome 4, Paris, 1932

Livre Jaune : France, Ministère des affaires étrangères, Documents diplomatiques

(1) まず参照すべきは何となく、Henri Cordier, *Histoire des relations de la Chine avec les puissances occidentales, 1860-1900*, Tome 2, Paris, 1902, pp. 242-551 および、邵循正『中法越南關係始末』國立清華大學、一九三五年であり、現在でもぬきんでた成果である。もっとも、フランス側の事情に詳しい前者が「露骨にフランスの立場を擁護している」(坂野正高『近代中國政治外交史——ヴァスコ・ダ・ガマから五四運動まで——』東京大學出版會、一九七三年、五九二頁)とするなら、中國外交史という視角から史實を再構成する後者は、露骨に清朝・中國の立場を

擁護したものである。その後、曾紀澤に焦點をあてた、李恩涵『曾紀澤的外交』中國學術著作獎助委員會、一九六六年、一六四―二四五頁、「越南問題」を通じて清末の權力構造説明を試みた、Lloyd E. Eastman, *Throne and Mandarins: China's Search for a Policy during the Sino-French Controversy 1880-1885*, Cambridge, Mass., 1967 が出ている。主として以上の成果に依據した、坂野前掲書三四―一三六九頁が簡潔にして克明、バランスのとれた概説となっており、これがあまりに卓抜な論述だったためか、日本語では專論がまだ出ていない。

ヴェトナム近代史研究の領域では、たとえば和田博徳『阮朝中期の清朝との關係（一八四〇年―一八八五年）——アヘン戦争から清佛戦争まで——』、山本達郎編『ベトナム中國關係史——曲氏の抬頭から清佛戦争まで』山川出版社、一九七五年、五七九―五八五、六四一―六四二頁、坪井善明『近代ヴェトナム政治社會史——阮朝嗣德帝統治下のヴェトナム 一八四七―一八八三——』東京大學出版會、一九九一年が當時の清佛交渉にふれるけれども、主たる關心はヴェトナムの立場にあつて、清佛關係の詳細に説き及ぶものはかえつて少ない。外國語のものも、それは同じである。しかしヴェトナムの「獨立性」「獨自の實體」をさぐるためにも、とりわけ清朝の立場と認識を明らかにするのは不可欠であろう。現在はそれすら、未解明なのである。また清佛戦争自體にかかわつて、中國語圏の研究がおびただしく存在するが、大づかみにいって、史料・論點いづれも以上を出ない。細部で問題となるところは、そのつぎ注記する。

- (2) 拙著『屬國と自主のあいだ——近代清韓關係と東アジアの命運——』名古屋大學出版會、二〇〇四年。
- (3) Cordier, *op. cit.*, p. 268.
- (4) 坂野前掲書、三五〇頁。
- (5) 抗議書簡は、le Marquis Tseng à Barthélemy Saint-Hilaire, le 10 novembre, 1880, cité par Cordier, *op. cit.*, p. 243. その漢文テキストは、『中法越南交渉檔』全七冊、中央研究院近代史研究所編、中國近代史資料彙編、臺北

一九六二年、第一冊、曾紀澤の桑迪里あて照會、光緒六年十月初八日、出使大臣曾紀澤の總理衙門あて咨文、光緒六年十二月三十日受理に添附、一四七―一四八頁。Cordier, *loc. cit.* は明確にこれを發端と見ており、また蔣廷黻編『近代中國外交史資料輯要』中卷、商務印書館、一九三四年、二七二頁もそれにしたがっている。當時の理解の一例として、*The Times*, Oct. 29, 1883, p. 3, "France and China"をみよ。

- (6) この曾紀澤の交渉については、さしあたり、邵循正前掲書、五九―六七頁、李恩涵前掲書、一六七―一九一頁を参照。曾紀澤がこのとき、にわかに抗議活動をはじめた動機と因果關係は、じつはよくわかっていない。そうした問題は、當時の在外公館の立場という觀點からあらためて考察を要するが、本稿では煩を避けていっさい省略にしたがう。別稿でとりあげる豫定である。

- (7) *Livre Jaune, Affaires du Tonkin, Première partie, 1874-décembre 1882*, Paris, 1883, Duclerc à Bourée, le 16 septembre, 1882, pp. 297-298. 『中法越南交渉檔』第一冊、曾紀澤の總理衙門あて函、光緒八年九月二十八日受理、五二四頁。

- (8) 邵循正前掲書、六六―七〇頁。「原則」という概念も、邵循正にしたがった。これはもちろん *Livre Jaune, Affaires du Tonkin, Première partie*, Gambetta au Marquis Tseng, le 1 janvier, 1882, p. 195 にある "une discussion de principe" の翻譯である（邵循正前掲書、六三頁）。

- (9) 坂野前掲書、三三三頁。
- (10) AE, Tome 60, Bourée aux membres du Tsong-Li-Yamen, le 17 octobre, les membres du Tsong-Li-Yamen à Bourée, le 18 octobre, 1882, annexes 3, 4 à Bourée à Duclerc, le 21 octobre, 1882.
- (11) *Livre Jaune, Affaires du Tonkin, Deuxième partie, décembre 1882-1883*, Paris, 1883, le Prince Kong à M. Bourée, le 29 [sic] octobre, 1882, annexe 1 à Bourée à Duclerc, le 3 novembre, 1882, p. 8. 譯文の漢語は、『中法越南交渉檔』第一冊、ブーレの恭親王あて照會、李鴻章の總理衙門あて咨文、光緒八年十月二十七日受理に添附、五四六―五四七頁に引く、恭親王の文言「越南係中國屬國」に據った。
- (12) *Livre Jaune, Affaires du Tonkin, Deuxième partie*, M. Bourée au Prince Kong, le 2 décembre[sic], 1882, annexe 5 à Bourée à Duclerc, le 20 décembre, 1882, pp. 9-10, 46. 漢文テキストは、『中法越南交渉檔』第一冊、ブーレの恭親王あて照會、李鴻章の總理衙門あて咨文、光緒八年十月二十七日受理に添附、五四六―五四七頁。
- (13) AE, Tome 60, Bourée à Duclerc, le 21 octobre, 1882.
- (14) *Livre Jaune, Affaires du Tonkin, Première partie*, Bourée à Duclerc, le 4 novembre, 1882, pp. 325-326.
- (15) *Ibid.*, p. 326, 下のブーレの報告には、「私信」の差出人を明記しておらず、ケルガラデックとしたのは、Marie Joseph Claude Edouard Robert, comte de Sennallé, *Quatre ans à Pékin, août 1880-août 1884. Le Tonkin*, Paris, 1933, p. 95 による。ケルガラデックの略歴は、Cordier, *op. cit.*, p. 285 を、ヴェトナムにおける活動は、坪井前掲書、七七―八〇頁を参照。もともとスマレの記述は、日附を「一月八日ないし九日」とし、またブーレがこの進言に「まったく反対だ (absolument hostile)」と外務省に書き送ったとするなど、メモリアルという文獻の性格からなのか、多分に正確さを缺く。したがって、この文獻およびおそらくは漢語史料のみに依據して、ブーレが發案した、と敘述する龍章『越南與中法戰爭』臺灣商務印書館、一九九六年、九八―九九頁も、信を置くことはできない。
- (16) 『清光緒朝中法交渉史料』全三卷、故宮博物院編、排印本、一九三二―一九三三年、卷三、「總理各國事務衙門奏法越交涉一事法人現欲與中國會商亟應先事豫籌善法摺」光緒八年十二月初十日、頁二四。
- (17) *Livre Jaune, Affaires du Tonkin, Deuxième partie*, Bourée à Duclerc, le 21 novembre, 1882, pp. 17-18.
- (18) 『曾惠敏公電稿』全國圖書館文獻縮微複製中心、二〇〇五年、「總署來電」〔光緒八年〕十月初四日到、一〇三―一〇四頁。
- (19) 『中法越南交渉檔』第一冊、光緒八年十月十九日受理、總理衙門あて李鴻章の函、五三二頁。『庸盦文別集』全六卷、薛福成撰、光緒二十九年、上海古籍出版社、一九八五年、卷三「代李伯相復曾宮保書」辛巳、一九〇―一九二頁。

も参照。

- (20) このあたりの事情については、もともこの問題にはかわりたくなかったが、總理衙門がプーレを天津によこしたので、やむなくうけもった、という李鴻章じしんの述懐(『李文忠公全集』朋僚函稿卷一〇、「復倪豹岑中丞」光緒八年十二月二十四日、頁三七)も参照。
- (21) 坂野前掲書、三五三頁。これは「現狀を維持する」と述べるところからみて、全體は佛文テキストによった敘述であろう(後註(23))。ただし「巡查保護」というのは、漢文テキストの表現であり(次註)、これを原語のまま引くところから判斷して、坂野氏も以下にみるような兩テキストの齟齬には、氣づいていたように思われる。
- (22) 『清光緒朝中法交渉史料』卷三、「李鴻章與法使寶海所議越南事宜三條」「總理各國事務衙門奏法越交涉一事法人現欲與中國會商亟應先事豫籌善法摺」光緒八年十二月初十日に添附、頁二五。
- (23) *DDF*, Bases de l'arrangement proposé par M. Bourée, Ministre de France à Pékin, Shanghai, 20 décembre, 1882, pp. 560-561.
- (24) 『中法越南交渉檔』第一冊、總理衙門あて李鴻章の函、光緒八年十月十九日受理、およびそれに添附、「回候法國寶海面談越南事宜節略」光緒八年十月十六日、五三三―五三五頁。
- (25) AE, Tome 60, Procès-verbal d'un entretien entre M. Bourée, Ministre de France en Chine, et le Vice-Roi Li-Hong-Tchang, au Consulat de France à Tien-Tsin, le 27 novembre, 1882, annexe 1 à Bourée à Duclerc, le 20 décembre, 1882.
- (26) 『中法越南交渉檔』第一冊、總理衙門あて李鴻章の函、光緒八年十月十九日受理に添附、「回候法國寶海面談越南事宜節略」光緒八年十月十六日、五三三―五三四頁。
- (27) 『中法越南交渉檔』第一冊、光緒八年十月十九日受理、總理衙門あて李鴻章の函、五三一頁。
- (28) 同註(24)。
- (29) たとえば、プーレは公使解任後、外務省に出した辯明の書翰(後註(42))で、前註(14)(15)所引の報告を念頭に、劃定すべき勢力圏を「中立地域 (la zone neutre)」と稱し、「一一月四日」には「厭うべきとみた (paraissait détestable)」この案を、「五日」に「望ましく思え (sembler desirable)」たと述懐している。
- (30) 『中法越南交渉檔』第一冊、光緒八年十月十九日受理、總理衙門あて李鴻章の函、五三二頁。とくに「巡查保護」という漢文テキストの措辭は、この直前まで朝鮮の「屬國自主」問題にたずさわっていた(前掲拙著、五一―一三三頁)ところからみて、馬建忠その人の發案だったと思われる。
- (31) 總理衙門あてプーレの公式書簡は、*Livre Jaune, Affaires du Tonkin, Deuxième partie*, M. Bourée à Leurs Excellences les Membres du Tsong-li-Yamen, Tien-Tsin, le 5 décembre, 1882, annexe à Bourée à Duclerc,

- le 27 décembre, 1882, pp. 56-58. その漢文テキストは、『中法越南交渉檔』第二冊、光緒八年十月二十七日受理、ブーレの總理衙門あて照會、五四九頁。それがフランスの立場からみて、必ずしも「承認」とはいえなかった、ということは、Un diplomate[Albert Billot], *L'Affaire du Tonkin: Histoire diplomatique de l'établissement de notre protectorat sur l'Annam et de notre conflit avec la Chine, 1882-1885*, Paris, [1885], pp. 29-30.
- (32) *Livre Jaune, Affaires du Tonkin, Deuxième partie*, Bourée à Duclerc, le 27 décembre, 1882, [reçu le 7 février], pp. 51-56. この漢文テキストは、『中法越南交渉檔』第二冊、五四四～五四五頁。
- (33) *Livre Jaune, Affaires du Tonkin, Deuxième partie*, Bourée à Duclerc, tél., le 29 décembre, 1882, p. 1.
- (34) E.g. Un diplomate, *op. cit.*, p. 20.
- (35) *Livre Jaune, Affaires du Tonkin, Deuxième partie*, Bourée à Challemel-Lacour, le 17 mars, 1883, p. 102.
- (36) 邵循正前掲書、七四頁。以後の、とりわけ中國語圈の研究は、フランス側の文獻史料に対する十分な検討を経ず、無批判にこのみかたを踏襲する。また Cordier, *op. cit.*, pp. 364-366は、トンキン問題とは別の、上海フランス租界の規則改訂問題という要因も指摘する。
- (37) 『中法越南交渉檔』第二冊、總理衙門あて李鴻章の函、光緒九年二月初一日受理、六二〇頁。
- (38) *Livre Jaune, Affaires du Tonkin, Deuxième partie*, Challemel-Lacour à Bourée, tél., le 5 mars, 1883, p. 70.
- (39) Un diplomate, *op. cit.*, p. 35.
- (40) DDF, de Mahy à Fallières, Confidentiel, 20 février, 1883, pp. 590-591. *North-China Herald*, Jan. 10, 1883, “The Tonquin Affair,” pp. 38-39.
- (41) *Journal officiel de la République Française, Débats parlementaires, Chambre des députés*, Session ordinaire de 1883, séance du mardi 10 juillet 1883, “Discussion des interpellation sur la politique du gouvernement au Tonkin et dans l’extrême Orient,” p. 1686.
- (42) Bourée à Challemel-Lacour, le 21 mars, 1883, cité par Cordier, *op. cit.*, p. 368, Semallé, *op. cit.*, p. 105.
- (43) *Livre Jaune, Affaires du Tonkin, Deuxième partie*, Bourée à Challemel-Lacour, le 30 mars, 1883, p. 111.
- (44) AE, Tome 61, Bourée à Challemel-Lacour, le 30 mars, 1883. 佛文テキストのイタリックは原文。なお「嗣徳王の戸部尚書」というのは、おそらく「刑部尚書」の誤りで、たとえば、『李文忠公全集』譯署函稿卷一四、「論越南防範變」光緒九年二月十七日、頁九にいう「越南陪臣范慎通」のことである。かれがだすやえたヴェトナム側の文書は、『中法越南交渉檔』第二冊、「越南國王密函」「越南國王呈文」二月十五日受理、六九九～七〇三、七〇四頁である。
- (45) *Livre Jaune, Affaires du Tonkin, Deuxième partie*, Bourée à Challemel-Lacour, le 17 avril, 1883, pp. 135, 136. これ

に對應する清朝側の史料は、『曾惠敏公電稿』『總署來電』
 「光緒九年」三月十五日到、二二五～二二六頁だが、やはり全文を収めるわけではない。

なおこうした李鴻章・總理衙門の態度は、フランスが「翻覆」した以上、「前議」のままおさめることはできない、非は向こうにあるのだから、弱みをみせてはならぬ、という馬建忠の獻策（『中法越南交涉檔』第二冊、李鴻章あて馬建忠の電報、光緒九年正月二十八日午後九時受理、および光緒九年正月二十九日午後五時受理、總理衙門あて李鴻章の函、光緒九年二月初一日受理に添附、李鴻章あて馬建忠の電報、光緒九年二月初六日午後一〇時受理、および光緒九年二月初七日辰刻、總理衙門あて李鴻章の函、光緒九年二月初八日受理に添附、六三一～六三二、六八九頁）が影響していたのかもしれない。かれは當時、上海に駐在し、天津を訪れる前のブルーとも接觸し、その解任の情報もいち早く掴んでいた。

(46) 周知のとおり、このトリクーとの交渉は、ブルーの時とは對蹠的に、李鴻章が自らなかば望んでとりかかったものであり（坂野前掲書、三五四頁）、有名なフランスにおける陳季同の裏面工作も、かれの指示によるという（桑兵「陳季同述略」『近代史研究』一九九九年第四期、一一八～一二二頁、李華川『晚清一個外交官的文化歷程』北京大學出版社、二〇〇四年、二二～二七頁）。

(47) 『李文忠公全集』譯署函稿卷一四、「答拜法使脫利古問答節略」光緒九年五月初四日附、頁一一～一二。この要旨

は當日、電報で通知されている。『李文忠公全集』電稿卷一、「寄譯署」五月初四日午刻、頁一七。

この漢文テキストが、後日この會談を知らせたトリクーの報告（*Livre Jaune, Affaires du Tonkin, Deuxième partie, Tricou à Challengel-Lacour, le 22 juin, 1883, p. 177*）とかなり異なる、という點は、すでに呂士朋「中法越南交涉期間清廷大臣的外交見識」、『清季自強運動研討會論文集』中央研究院近代史研究所編、一九八八年、上冊、二九九頁が指摘する。もともと、トリクーがさらに後日、送った「詳細なレポート（un rapport détaillé）」には、李と一致した意見として、「清朝にはフランス側の計畫を（直接的にも間接的にも）（*Ni directement, ni indirectement*）妨げる意思はない」、一致しない李の主張として、「とりわけ意見の異なるのは宗主權の問題だ。これは太古の時代からわれわれが有する權利である」というのをあげている（*Livre Jaune, Affaires du Tonkin, Deuxième partie, Tricou à Challengel-Lacour, le 1 septembre, p. 248*）。たしかに漢文テキストに記載する文言は、やりとりされているのである。トリクーの側は一致しない點も折り合える見通しがある、「好ましむ展開（une tournure favorable）」とみて、むしろ前途を樂觀したのに對し、李鴻章の側は警戒を解かず、對立點をむしろきわだたせて報告文を作成し、北京に打電したものと解釋するのが妥當であろう。この二つの論點の關連づけについては、後註（56）を参照。

果たしてこれに對する總理衙門の返電は、

初四の密電、悉せり。脱の「越を認めて中の屬と爲さず」と言ふ、此の説は自づから須らく力爭すべし。……此くの如く保護するは、原と越が屬國爲るに因ればなり、我既に保護の責を盡せば、即ち他人の越を取るに聽す能はず、中國並びに法に於て和を失はんと欲すに非ざるなり。……（『李文忠公全集』電稿卷一、「譯署來電」光緒九年五月初七日未刻到、頁一九）とあり、さらにトリクーを説得するよう申しつけたのである。

- (48) 『李文忠公全集』譯署函稿卷一四、「接見法國脱使問答節略」光緒九年五月十三日附、頁一四一―一五。この要旨は當日、電報で通知されている。『李文忠公全集』電稿卷一、「寄譯署」光緒九年五月十三日午刻、頁一一。

このようにフランス外務省からの電報は、*Livre Jaune, Affaires du Tonkin, Deuxième partie*, Challengel-Lacour à Tricou, tel., le 13 juin, 1883, pp. 138-139だが、「明助」「暗助」云々のくだりはみあたらない。

- (49) *Livre Jaune, Affaires du Tonkin, Deuxième partie*, Tricou à Challengel-Lacour, tel., le 18 juin, 1883, pp. 139-140.
 (50) *Livre Jaune, Affaires du Tonkin, Deuxième partie*, Tricou à Challengel-Lacour, le 22 juin, 1883, p. 179. 引用文は後註(53)にみる。雙方の合意を試みた會談交渉よりも前の日附だが、トリクーはその交渉が終わってからも、同じ趣旨をくりかえしている。Tricou à Challengel-Lacour, tel., Confidentialle, le 4 juillet, 1883, cité par Corder, *op. cit.*,

p. 397.

- (51) 邵循正前掲書、八四頁。

- (52) *E.g. Livre Jaune, Affaires du Tonkin, Deuxième partie*, Challengel-Lacour à Tricou, téls., le 13 juin et le 3 juillet, 1883, pp. 138-139, 150-151.

- (53) 『李文忠公全集』譯署函稿卷一四、「法國脱使來晤問答節略」光緒九年五月二十六日附、頁一八一―一九。この要旨は當日、電報で通知されている。『李文忠公全集』電稿卷一、「寄譯署」光緒九年五月二十六日申刻、頁二六。これに對應する、六月三〇日の會談を報じたフランス側史料として、*Livre Jaune, Affaires du Tonkin, Deuxième partie*, Tricou à Challengel-Lacour, téls., le 1 et le 3 juillet, 1883, pp. 149, 151を参照。

- (54) トリクーは自ら「清朝の「宗主權」の「問題は棚上げにしよう」と答えた」と明記している（*Livre Jaune, Affaires du Tonkin, Deuxième partie*, Tricou à Challengel-Lacour, le 1 septembre, p. 248）のび、もちろんかれ自身がかびかけた可能性はある。けれどもそれが、ブルーレの時ほど公式な發言「言明」方針であったかは、かれの電報ならびに報告をみるかぎりでは疑わしい。清朝側の史料たる前註の引用文で、「不必明認」と特筆するのは、後註(56)の引用文と整合させるための作爲とみることも可能である。
- (55) *Livre Jaune, Affaires du Tonkin, Deuxième partie*, Tricou à Challengel-Lacour, tel., le 3 juillet, 1883, pp. 151-152; Tricou à Challengel-Lacour, le 1 septembre, 1883, p.

250.

(56) 『李文忠公全集』譯署函稿卷一四、「法國脫使來晤問答節略」光緒九年五月二十七日附、頁一〇。對應するフランス側史料は、

Livre Jaune, Affaires du Tonkin, Deuxième partie, Tricou à Challenel-Lacour, tél., le 3 juillet, 1883, p. 152; Tricou à Challenel-Lacour, le 1 septembre, 1883, pp. 250-251. もちろんやりとりの漢文・佛文テキストにはかなりの出入があつて、佛文テキストに記載されていないくだりが多い。引用した「屬邦名分」云々もそうであり、またトリクーになるべく李鴻章の要求に應じようとつとめたところもそうである。兩者共通して記すのは、け

っきよく合意にいたらなかった、サイゴン條約の承認を明記するかどうかの問題であつて(『李文忠公全集』譯署函稿卷一四、「法國脫使來晤問答節略」光緒九年五月二十七日附、頁一一、*Livre Jaune, Affaires du Tonkin, Deuxième partie, Tricou à Challenel-Lacour, tél., le 3 juillet, 1883, p. 152.* 邵循正前掲書、八〇―八一頁)問題の根源はやはり、そこにいうヴェトナムの「獨立」とフランスの「保護」が、清朝の「原則」に反するにあつたわけである。

(57) 『李文忠公全集』朋僚函稿卷二〇、「復倪豹岑中丞」光緒八年十二月二十四日、「復張黃齋署副憲」光緒九年五月二十日、頁三六―三七、四三。『潤于集』書牘卷三、「復唐鄂生中丞」頁九。

(58) *Journal officiel, Débats parlementaires, Chambre des députés, séance du mardi 10 juillet, 1883, p. 1693. Livre*

Jaune, Affaires du Tonkin, Deuxième partie, Challenel-Lacour à Tricou, tél., le 11 juillet, 1883, p. 167. Un diplomate, op. cit., p. 58.

(59) つれにいつては、もしあたり李恩涵前掲書、二〇七―二一三頁を参照。ヴェトナム問題にかかわる曾紀澤の交渉、および主張の詳細な推移については、なお検討の餘地がある。これも別稿でまとめてとりあげたい。當時の李鴻章と曾紀澤が手法はちがつても、ともに最終目標を「分護」に置いていた點は、同上、二〇五―二〇六頁が論及する。

(60) たとえば、『李文忠公全集』譯署函稿卷一四、「與法使德理固問答節略」光緒九年八月十八日附、「與法使德理固問答節略」光緒九年八月二十五日附、頁三六、四八。*Livre Jaune, Affaires du Tonkin, Deuxième partie, Tricou à Challenel-Lacour, tél., le 26 septembre, 1883, p. 206.*

(61) *Livre Jaune, Affaires du Tonkin, Deuxième partie, Entretien de M. Jules Ferry, chargé par intérim du Ministère des affaires étrangères, avec le Marquis Tseng, p. 224.* この會談は一八八三年九月二十七日に行われたものであつて、この交渉内容も別に考察を要する。さしあたって、李恩涵前掲書、二一一―二一二頁を参照。この會談記録には、曾紀澤が本國に送つた漢譯問答體のものもあり、そちらのほうが直截で具體的な表現になっていて、わかりやすいかもしれない。引用部分を引こう。「中國は越南の上邦爲ると雖も、虛文の故事に過ぎず、毫も實跡無し、既に越南の事を理めず、亦た紅江の賊を除かず、法既に其の事に任ぜり

矣、其の權を行へり矣。而も今法をして自ら前功を棄てしめて、中國の上邦たるの虛文を以て變へて、越南を管轄するの實跡と爲し、越南をして中國の版圖に入らしめるを致さんと欲す、法國豈に允許する能はんや。」(『中法越南交渉檔』第三冊、一三九一頁)。

(62) この點は以上の行論で明らかで、もはや論證するまでもないことかもしれないが、漢文・佛文の史料により、あらためて例をあげておこう。一八八一年一月七日、ペテルブルグでの曾紀澤とフランス大使シャンジ (Antoine Eugène Alfred Chanzy) との會談で、「貴國約に照して該國を保護するに係る」(『中法越南交渉檔』第一冊、曾紀澤・商厘との「問答辭」光緒六年十二月初八日、曾紀澤の總理衙門あて夾單、光緒七年二月一九日受理に添附、一五一頁) という曾紀澤の發言を、シャンジは「貴國が一八七四年の條約に據つてヴェトナムに行使する保護權 (Le protectorat que vous exercez, en vertu du traité de 1874, sur l'Annam)」と本國に報告した (*Livre Jaune, Affaires du Tonkin, Première partie*, Chanzy à Barthélemy Saint-Hilaire, le 8 janvier, 1881, p. 169)。まだ曾紀澤側の漢文テキストをみられなかった邵循正前掲書、六二頁註(17)は、フランス大使の報告に對し、「保護」を「保護權」と「誤記」した疑いがある、と推測した。その慧眼には、敬服のほかない。このときの通譯は、曾紀澤に隨行した慶常だったから、シャンジの報告にあるようなフランス語の譯語といいまわしを、かれが提示したとどうてい思えない。漢

文テキストにより逐語的に忠實なフランス語だったはずである。それをシャンジがこのように「誤記」したところこそ、當時のフランス側の通念があらわれているといえよう。前註(12)所掲の恭親王あてブルーレの照會も同じで、「保護權をもっている (notre protectorat)」という佛文に相當する漢文テキストは、「越南を保護するの約」である。サイゴン條約の「保護」を「保護權」と同一視する思考は、すでに當初から明白なのである。

したがって、たとえば A. H. Foucault de Mondion, *La vérité sur le Tonkin*, Paris, 1889, p. 5 に述べる「サイゴン條約は「ヴェトナムに行使すべき政治的な保護權の設定をとりあげたものではない。たんなる平和友好條約だ」という點を見のがしてはならない。そのため逆に、「保護權」を明文化したフエ條約が必要となるわけである。

(63) 『清光緒朝中法交涉史料』卷四、「内閣學士周德潤請用兵保護越南摺」光緒九年四月初七日、頁六。この論理は、「ヴェトナムが中華の屬國だから、全土すべて中國の保護に歸すべきだと論ずるのは、泰西の通例である。しかし中國は舊來、朝貢國に對しその内政に關與してこなかったし、いわんや保護する、という明文もなかった」(『李文忠公全集』朋僚函稿卷二〇、「復倪約亭中丞」光緒八年十二月二十四日、頁三六) という李鴻章の發言と讀み合わせると、その位置づけがいっそうよくわかる。

管見のかぎり、少なくともヴェトナムの文脈では、一八八二年一〇月より前に、清朝本國內でこうした「保護」の

概念は論及されていない。もっとも早いものは、曾紀澤がシヤンジに提起した「法國該國を保護せんと欲するは、固より好意に屬す、然れども中國もまた保護の權を操つ」〔中法越南交渉檔〕第一冊、曾紀澤・商厘との「問答辭」光緒六年十二月初八日、曾紀澤の總理衙門あて來單、光緒七年二月一九日受理に添附、一五〇頁）という命題であらうが、それを本國がどのようにうけとめたか、そうした経緯はなお明らかではない。

(64) 坂野前掲書、三五三頁

(65) *Journal officiel, Débats parlementaires, Chambre des députés*, p. 1686.

(66) じつさい清朝側でも、トンキンの南北分割「保護」は、容易に實施しがたいという趣旨を、現地當局も、いわゆる「清議」もうたっている。前者はたとえば、唐景崧『請纓日記』光緒八年十二月二十九日の條、中國史學會主編『中法戰爭』全七冊、新知識出版社、一九五五年、第二冊所收、六一頁、『清光緒朝中法交渉史料』卷三、「廣西巡撫倪文蔚密陳邊籌法越交涉事宜摺」「倪文蔚密陳越南國勢分界保護實無把握片」光緒九年正月十六日、頁二九―三〇。後者の典型例としては、『澗于集』書牘卷二、「復張孝達中丞」頁二四、同奏議卷三、「法諜謠傳不足徵信片」光緒九年五月十七日、頁三三を參照。

BETWEEN *VASSALITÉ* AND *PROTECTORAT*: THE SINO-FRENCH CONTROVERSY ON THE TONKIN AFFAIR, 1880-1883

OKAMOTO Takashi

The results of the Treaty of Tientsin, concluded in June of 1885, which put an end to the Sino-French War were the “loss” of the vassal state of Vietnam by China and a giant step toward achievement of its colonization by the French. Given this outcome, the changes that occurred in the course of what is known as the “Tonkin Affair” might be termed a matter of course. Nevertheless, in regard to many of the facts that led to warfare between France and China, much remains unclear such as what brought about their confrontation, how they reached a compromise, the specific interests that concerned them, and the diplomatic negotiations between them. This article explores clues to explain such questions by examining the course of the negotiations from the proposal of the Li-Bourée convention concluded in late 1882 until its later abandonment.

The confrontation between France and China over the Tonkin Affair became conspicuous when the Chinese minister to France, the Marquis Tseng 曾紀澤, protested to the French Ministry of Foreign Affairs at the end of 1880. In the negotiations between the French minister to China, Frederic-Albert Bourée, and the Tsungli-Yamen at Peking in 1882, parting spheres of influence in Tonkin was proposed, and at the end of the same year, was put in writing during the negotiations with the imperial commissioner for the Northern Ports, Li Hung-chang 李鴻章, at Tientsin. However, the term *hsün-ch'a pao-hu* 巡查保護, meaning to surveil and protect, which appears in the Chinese version of the Li-Bourée convention, was recorded only as *surveillance* in the French, resulting in a discrepancy. This expresses the interests of the two parties and latent contradictions regarding them.

In opposition to the Chinese use of the term *pao-hu* “protect,” which furthered the advocacy of the *vassalité* of Vietnam to China, the French denied the *suzeraineté* of China by not referring to protection and thereby aimed to win recognition of Vietnam as a *de facto protectorat* of France. In this fashion, not only were the fundamental interests of the parties at odds, but this became increasingly apparent, so that the rejection of the Li-Bourée convention was inevitable. There was no easy way that the confrontation might be ameliorated in the following

negotiations between Arthur Tricou and Li, and France and China proceeded step by step toward rupture and warfare.

THE PICTORIAL MAGAZINE *LIANGYOU* AND THE OVERSEAS CHINESE NETWORK: THE HISTORY OF “SHANGHAI” POPULAR CULTURE AS SEEN FROM ITS RELATIONSHIP WITH HONG KONG AND THE OVERSEAS CHINESE SPHERE

MURAI Hiroshi

This article primarily considers the socio-economic background of the media in the case of the pictorial magazine *Liangyou* 『良友』, which is known to have been replete with images representing modern Shanghai. Around its staff, capital, and expanding market.

When *Liangyou* was launched, the publishing company, Liangyou Gongsi, was under the strong influence of a network of people from Taishan, the hometown of the founder, Wu Liande 伍聯德, and his alma mater, the Lingnan School 嶺南. The network centered on people from Taishan, Where many emigrants were produced, and the many overseas Chinese who had studied at the Lingnan School spread across the seas under the impetus of Wu Liande's travels abroad, and those living in Hong Kong and overseas Chinese in the United States occupied a prominent place among its stock holders. After sales of *Liangyou* stabilized, the circulation expanded beyond the limits of Wu's personal efforts. In contrast, a shift in the emphasis towards domestic matters began to be seen in the *Liangyou* of the 1930s, accompanying its expansion in the domestic market. This brought about a strengthening of the relationship with leftist authors of the New Literature movement and marked at the same time the beginning of a new page in the history of the Liangyou Gongsi 良友公司.

Expanding the perspective, one sees that the department stores, films and other industries that symbolize the modernity in the popular culture of Shanghai between the two world wars all first appeared within the context of the network of overseas Chinese from Guangdong, and the appearance of the pictorial magazine *Liangyou* can be placed within this tread. Here is created the task of resituating cultural production of Shanghai of the 1920s and 1930s within the sphere of Hong Kong and overseas Chinese throughout the world.

This study can be situated as one portrait within a series of efforts to depict the